



世界一周航海記 1



グループリビングえんの森 安岡芙美子

昨年8月13日から11月24日まで世界一周の旅に出ました。横浜を出港し、東シナ海、南シナ海を経て東南アジア諸国をまわり、海賊を警戒しながらアラビア海を横断、スエズ運河を通過し地中海の国々に立ち寄り、ジブラルタル海峡を抜けて大西洋を北上、アイスランドを回り南下、アメリカへ、さらにカリブ海では中米の国々を訪問後、パナマ運河を通過し、ハワイを経て横浜に帰るといふ長旅となりました。

様々な国に立ち寄る中で特に気づいたのは経済発展によるそれぞれの国の雰囲気の違いでした。中国の厦門(アモイ)では経済発展のさなかの勢いと自信が感じられました。長い鎖国状態が続いたミャンマーは経済・社会の発展が遅れ、首都を一步出ると戦後すぐの日本のような荒廃した風景が広がっていました。そんな中で仏塔ばかりは燦然と金色に輝いており仏教による支配の強さを感じさせられました。その他の東南アジアの諸国はなかなかの繁栄ぶりで、日本は安閑としているとすぐにでも追いつかれ追い越されそうな気がしました。これらの国々は国民の平均年齢も若く、子供ばかりが目立ちました。

地中海諸国は古い文明を擁した観光国でとにかくすばらしく美しいところでした。エーゲ海を見下ろす岬にたつポセイドン神殿(ギリシャ)、迷宮で有名なクノッソス(クレタ島・ギリシャ)、エーゲ海の真珠とうたわれたドブロブニク(クロアチア)、火山噴火で埋もれたポンペイ(イタリア)はまだ半分しか発掘が進んでいませんでしたが、高度で見事な文明の跡がみられました。地中海地方最後に訪れたスペインではカタローニヤ地方の独立分離の運動の真っ最中で街中をカタローニヤの国旗をまとった人々が歩いていました。

大西洋にはいって訪れたのはポルトガルのリスボンで、ヨーロッパ最西端のロカ岬には「ここに地終り海始まる」と書かれたオベリスクが建っていました。大航海時代、地球が丸いことが知られていなかった頃、つまり海の果てに行けば奈落に突き落とされると信じていた時代に勇気ある船乗りたちがここから海に乗り出したのです。当時の人としてはエンリケ航海王子、バスコ・ダ・ガマなどが知られています。

フランス、イギリスなどは皆さんなじみのあるところなので省略しますが、イギリスでもスコットランドのエディンバラは城を後ろに石造りの街並みが続く重厚、壮麗なところで日本が木の文化であるのに対して、石の文化を感じるころでした。
(次回えん通信No.6へ続く)